

閉鎖性海域の再生プログラム 伊勢湾漁場環境浄化型漁業推進事業 アサリ資源管理型漁業推進事業

水野知巳・程川和宏・竹内泰介（農水商工部水産資源室）・廣岡慎介（伊勢農林水産商工環境事務所水産室）・宮本敦史・横田圭五（津農林水産商工環境事務所水産室）・日向野純也・長谷川夏樹（水産総合研究センター養殖研究所）

目的

伊勢湾のアサリ漁場の生態系管理を促進し、アサリ資源の持続的利用をはかるため、伊勢湾での浮遊幼生や稚貝の発生状況を把握するとともに、漁業者向けのアサリの資源管理指針を作成し、各地先での資源管理の取り組みを支援する。

方法

調査船あさまを用いて、5～11月まで月1回の頻度で伊勢湾全域の浮遊幼生の発生状況を把握するとともに、伊勢地先、下御糸地先及び鈴鹿地先において、年4回の頻度でアサリの稚貝～成貝の密度を把握した。さらに、伊勢湾の3地区で、漁業者、普及指導員とともにアサリ資源管理の取り組み（伊勢：網張り区への稚貝放流、松阪：漁場耕運と耕運区への稚貝放流、鈴鹿：ノリ漁場でのアサリ垂下）を行った。

伊勢湾のアサリの生態と資源動向、漁場環境、各地先の資源管理の現状と問題点を整理して、三重県アサリ資源管理マニュアルを作成する。

結果および考察

各地先での春季のアサリ親貝の肥満度（軟体部重量/総重量）は35を超え、近年では最も高かった。

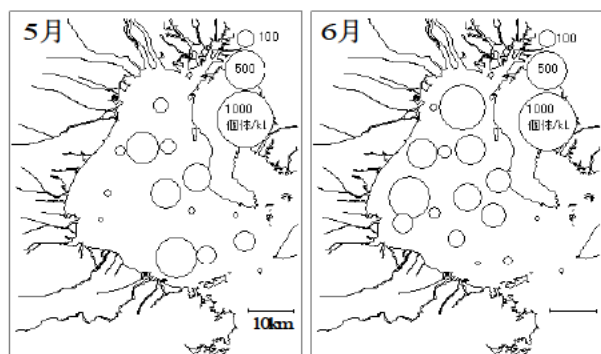


図1. 伊勢湾でのアサリ浮遊幼生の発生状況の一例（2000年5月と6月）

この原因としては、2008年は浅海定線観測での珪藻赤潮が長期間発生し、全測点のクロロフィル値の年間平均値が2000年代では最も高かったことから、餌料となる植

物プランクトンが多いことが影響したことが示唆される。

伊勢湾全域の浮遊幼生調査では、多くの測点で100個体/1,000L以上の、伊勢湾としては高密度の浮遊幼生が観測された。伊勢、明和、鈴鹿沖漁場では、春季発生群の着底稚貝が100/10c㎡以上の高密度で着底したが、秋季から冬季にかけて明和沖漁場と鈴鹿沖漁場では稚貝が減耗した一方、松阪沖では2009年3月現在も殻長10mm程度の稚貝が1,000個体/㎡程度の高密度で生残している。松阪では10月と1月に、村松地区では11月に㎡あたり300個程度の密度で放流を行ったが、3ヶ月程度でほぼ放流貝が採捕されない状況になった。村松地区では流向流速計を設置して波浪の影響を調べたが、観測された流速は概ね毎秒10cm/s未満であり、波浪による散逸は少ないと考えられた。放流前の事前調査では、ツメタガイは調査区周辺ではまったく確認されなかったが、放流後1ヶ月後には、5～7個体/㎡が試験区に侵入していることが確認され、アサリの死殻のほとんどに食害痕が認められた。ツメタガイは地盤高の高い測点では確認されず、低い測点のみ食害痕のある死殻が確認されたこと、地盤高の高い測点ではアサリの生残率が高いことから、食害の影響は大きいと考えられた。ただし、地盤高の高い場所では、アサリの成長が妨げられるので生残が良くても放流には適さない。愛知水試（2009）によれば、ツメタガイの侵入を妨げるためには、高さ10cm以上の遮蔽物が必要であることから、目合いの細かいトリカルネットを立てた状態で干潟に敷設する必要があると考えられた。

なお、本事業で作成したアサリ資源管理マニュアルは、来年度以降のアサリ研修会で使用する予定である。

関連報文

三重県（2009）：三重県アサリ資源管理マニュアルⅠ—アサリの基礎知識編—，19p.

水野知巳・丸山拓也・日向野純也（投稿中）：伊勢湾のアサリ漁業の変遷・現状と今後の展望（総説），三重県水産研究所研究報告，vol. 17.

三重県（2009）：平成20年度伊勢湾漁業海援隊研究実践活動支援事業成果報告書.